

龍南會雜誌第叁拾貳號附録

甲午修學旅行日記

秋月胤繼
杉山富樫 共述

天高く氣清く、金風颯颯として木葉空に飄り、霜露既に下りて萬林錦を染む。豈に遠征の好時節ならずや。況や今清國覺を開き、我百萬の貔貅遠く敵地に在り、海に陸よ、激戰奮闘、其苦辛想ひ見るべし。且つ露英は豺狼あり、耽耽として東洋に雄飛せんとする久し、東洋の危機方に迫る、我國の前途益々多事あらん。吾輩少壯の士、豈に惟だ優優文墨を弄するを以て足れりとせんや。此際須らく櫛風沐雨、艱難を試み苦楚を嘗め、以て心力を鍊り、魂膽を鍛ひ、以て國家有用の資とあすべし。則ち我校職員生徒、十一月五日を卜し修學旅行を肥筑の野に試む、豈に偶然ならんや。

五日

晴。碧天洗ふが如く、旭日爛射、快言ふべからず。八時一行、期の如く集り、悉く体操場に整列す。全員を一大隊に編制し、秋吉教官之に長たり。分て一中隊とし、更に分て六小隊、二十四分隊とす。山川端夫は第一中隊長たり、西川文市は第二中隊長たり、大塚末雄は大隊副官たり、其他各小隊長各分隊長の任命あり。部署已に定まり、圓陣を作る。中川學校長徐ろに其中央に進みて、嚴々、訓令す。曰く、

我校は此度肥筑地方に修學旅行を試みんと欲し、愈々本日より出發す。一行人員の豫期せよより、少かりしは遺憾あれども、諸子の能く奮つて此行に加はれるは、大に満足する所あり。例に依り、軍隊組織を以て行ふべければ、軍隊役員の命に従ふべきは勿論、奮て同行せらるゝ、教員諸君の命にも

亦従はざる可らず。殊に規律を嚴守せ、何くに於ても我校の美風を表示すべし。宿舍食事等十分ならずとて、決して不平を鳴すべからず。途中買喰すること勿れ。人口稠密ある處に於ては、特に言行を慎むべし。諸學校生徒の歡迎に對ては深く謝意を表せよ。十分に節食して健康を保てよ。些細の事を以て醫師を煩すこと勿れ。

右了りて大隊長の告辭あり。曰く

諸子は今學校長より賜りたる訓令を遵奉せざる可らず。猶ほ一言注意を要することあり。途中疲勞せる時は、或は列を亂し易し、一たび之を亂す時は再び之を正すこと困難なれば殊に注意すべし。行軍中は勉めて軍隊の威嚴を保つべし。

さて圓陣を解きて整列し、將に發せんとするに際し、秋吉大隊長は更に宣言して曰く、

不肖秋吉の命令は之を秋吉の命令と思はず、大隊長の命令と思つて、遵奉せよ。途中にて不正の行為あらば不肖は毫も寛假せずして之を處分すべし。

約束已に整ひ九時行を啓く。中川學校長以下總員二百五十名。喇叭嚙唳、一行肅々として校門を出つれば、颯颯たる龍山の松籟、滔滔たる白川の水聲、宛然一行を送るに似たり。路を洗馬橋に取り行くまど一里、春日停車場前に休す。時に日已に高く、歩頗る熱す。春日村を出つれば平田彌望、沃野數里に連る、時正に晚秋、禾稻已に熟し、刈ること半に及べり。花岡山を右に見て過ぐ。阿蘇甲佐の二岳は蜿蜒とて遠く東南よ走り、薄く烟靄を帯び、西には宇土山あり、北には金峯山ありて相對峙す。近山の木葉早きは已に黄み、遲きは淺綠あり、兩者相伍し、風之を激せば、黃綠の激浪忽ち起る、亦奇觀あり。然れども晴天連日、道路乾燥し、砂塵面を衝きて、殆ど堪ふべからず。行くこと二里、高橋町を経て、正

午松尾村に着すれば、既に船を繋ぎて相待てり、船総て九艘各船校旗を建て岸片風に從て飄るを見る、亦爽快。休息少時、漸次乗船し、午後一時出船す。適ま西風急あり、路塵烟の如き、舟子皆恐る。百貫石に至る頃、西風猶急あり、乃ち船を停め、次潮を待て發せんとす。午後七時まで隨意散步を許す。此夜片雲全く散じ、長煙一空、皓月千里、浮光金を躍らえ、靜影壁を洗ひ、亦絶景をま。然れども夜風冷然、寒氣肌に徹す。夜半潮満ち、風も亦和ぐ、乃ち發す。月已に没すれども星斗爛然。百貫石を出て帆を順風に擧ぐ、船駛すること速なり。船内狹隘、頭足相枕し、殆ど寝ぬること能はず。更深くるよ及び冷氣益加はる。途中海波少く高し。

六日

晴。曉起、甲板に上れば遙に島原港を迷霧の中に見る。時に風全く和ぎ、海面鏡の如し。午前八時半湊町に着す。南高來郡長、及び郡書記等來り迎ふ。直ちに湊尋常小學校に至り樓上にて休息す。郡長及び有志者より茶菓の饗あり。已にして湊町を發し、午前十一時嶋原町に着す。午餐を傳へ、隨意散步の命あり。衆相率ゐて城址を見る。城は松倉氏の築きとありといふ。温泉嶽を後にし、嶋原灣に臨み、眺望絶佳、仰で四方を望めば千峯萬岳悉く晴れ、山勢逶迤として數十里に亘り、俯するものは笏の如く、植ものは筭の如く、削るものは圭の如く、聯るものは壁の如く、淡然として脣眉の遠きに横はる。俯して低きを見れば、有明海灣、二碧萬頃、平穩熨の如く、平野相連り、亭觀村舍、其間に點綴し、丘原林麓、田疇墟落、高低上下の位置宜きを得。眞に天然の活畫圖にして。悉く寸眸の中に集る、心氣乍ら豁然、人をして遺世の想あらしむ。蓋し亦奇觀あり。

此日二部生十一名は本隊に別れ、大幸教授及び篠本講師に從うて、温泉嶽に登りて鑛物を採収す。

嶋原半嶋は、即ち長崎縣南高來郡ふして、有馬氏代々の領地ありき。慶長十九年左衛門佐直純、日向に移され、公領とある。元和二年、松倉豊後守重政、大和五條より移りて島原を治む。神代、古部、及び伊古の各村は、佐賀領ふして、鍋嶋家の知行所たり。寛永年間、耶蘇教徒騒亂の後、松倉長門守重次、封を沒收せられ、高力攝津守忠房代り領す。其子右近大夫隆長罪ありて、封を除かれ、暫く公領とあり、後、寛文九年、松平主殿頭忠房、丹波の福知山より移り、七萬石を領せり。五世主殿頭忠祿に至り、宇都宮に移り、戸田能登守忠辰代り領し、寛永四年其子忠寛に至り、松平主殿頭忠恕と代り、再後松平氏世々之を領し、明治維新に至る。

半島は、東西凡そ三里、南北凡そ七里、面積凡そ廿七方里。温泉岳ろの中央に聳じ、四方に支派を發す。嶋原は半嶋の東端にあり、寛政年間眉山破裂し、此邊の海洋ありしを平地たらしめて、さて今日の平野を成し、あり。船舶は皆湊町に寄泊す。四近嶋嶼多く、皆砂岩より成る。風潮其趾を噬み、漸く崩壞して暗礁とありしものも、亦た渺からずと云ふ。港内は此等の土砂及び眉山より崩れて流下せる土砂によりて、水漸く淺く、人徒に之を傍觀して施す所を知らず。

嶋原舊城は元和年間、松倉豊後守之を築く、森岳山の高地を城とせし、が故に森岳城とも云ふ。西方は眉山の峻峰を負ひ、前面は有明洋を隔て、肥後と相臨む。右方に蜿々たるは宇土半嶋にして、雁回山、金峯山、小代山は雲烟縹糊の間歴々之を指點すべし。城中一の丸は最も南に位して最も高く、二の丸、三の丸は其北に位す。二の丸の跡には高等小學校あり、是と一の丸との間の深壕は、舊時階廊を以て之を通せりと云ふ。

龍造寺隆信の墓は上の原の護國寺に在り、隆信山と云ふ。隆信の裝束を埋めたる所あり。隆信の戰

死せし地は之を確知す可らず、或は島原城諫早門外沖田宇二本木に在り云ひ、或は下津を隔てたる神代領と稱して耕作せざりし土地に在りとも云ふ。抑も隆信は、東部肥筑を略し、嶋津氏及び大友氏と九州に鼎立の勢をなせり。天正十二年、隆信自ら兵を率ゐて、有馬氏を攻む、有馬晴信嶋津氏の援兵を得て之を嶋原に邀へ森岳城に陣す。隆信輕進して之に迫り遂に戰没せり。寛永十四年西南地方の耶蘇教徒亂を爲す、嶋原城兵深江村の賊を討て之を敗る。時に南目各村の賊徒嶋原城に迫り、火を放ち城を攻て克たす。天草嶋の耶蘇教徒も亦た亂を爲し、相合して南有馬村原の古城に據る。幕府兵を發して之を圍み、屢攻て克たす。追討使板倉内膳正重昌之に死す。松平伊豆守信綱之を繼ぎ、翌年二月廿八日城を陥れ、男女三萬餘人を屠る。官軍の死傷一萬三千余人。之を有馬吉利支丹一揆と云ふ。森岳城は形勝を占め、攻むるに難し、叛徒の克つ能はざりしも亦た理なきにあらず。原の古城は嶋原を距る南六里許の處にあり。

嶋原附近の地は商業農業の如き毫も見るべきもなく、唯だ漁業のみ盛大なり。漁民は遠く五嶋對州薩摩の沿海に出漁し、或は遠く土佐の海岸に至るものもありと云ふ。製作物の重なるものは砂糖樟腦木臘等ありとす。

午後一時嶋原を發す。行くこと一里半、三會村に休む。嶋原以往道概ね海に瀕み、白砂青松相連り、風景絶妙。海波殊に穩に、孤帆遠く懸る、ろの狀畫も如かず。東方遙に白雲の空湧するは蘇岳の長煙をり、北方に黒煙を見るは三池の煙筒なり、肥筑の諸山蜿蜒として南北に走り、温泉嶽之と相對す、有明洋其間に在り、宛然大湖の如し、多比良村に至れば神代高等小學校生徒來り迎ふ、少らく休し又行くこと一里、午後五時神代村に入る。有志者諸氏牛一頭を屠りて一行を犒ふ。此日行程六里。

神代の城は足利時代鍋島彌平左衛門の築きしかり、城址は今判然之を認むるを得ず。天明年間神代尊茂之に居てより、此地佐賀領とあり、鍋嶋家に属す。其以前は土豪之を支配す。近村西郷村よは西郷石見守ありし、是れ土豪の一あり。龍造寺氏有馬氏と兵を構へたる時は、此地の者龍造寺氏に従へりと云ふ。江里口藤吉兵衛奇功を爲したりとの傳へあれども確知し難え。神代神社は鍋嶋家の此地に來りて先を爲せる人の靈を祀れるあり。此地人口二千、高等小學あり、尋常小學あり。半嶋北端の一小都會なり。

七日

晴。午前六時神代村を發す。曉氣稍寒し、日未だ昇らず、曉霧淡々、遙に紫海を眺むれば烟波渺々として遠く相連り、遠山は靄を籠めて晝よりも鮮かに、北方多良岳嶄然として天半よ聳え、煙霧深く之を籠め僅に山頂を顯せる、宛然嶋嶼を描き出せり、其奇景言ふ可らず。西郷村に至りて夜全く明く。行くこと一里半、古部村に休む。日昇る已に三竿、爛然人を射る。發す、路常に海よ沿ふ、烟霞全く收りて遠山形を顯はし、近くは多良岳前岸に屹立し、其下碧波渺々、磯を打つ細浪は、斜々として音あり、濱よ横はる青松は、颯颯として聲あり。一行此間を迂回して行く、時ありて勇壯ある軍歌を唱ふれば、大濤岸を打て至るが如き想ありて、意氣昂然たり。行くこと一里半、愛野村に至りて休む。是より路漸く海を離れて田畦の間に入る、時に晚稻全く收まり、一面の土田黍粟の點布するを見るのみ。遙に雲際を望めば温泉岳屹然中天に聳え、蒼翠拭ふが如し、行くこと一里、午前十時愛津村に休む。愛津は嶋原半嶋の頸に當り、地勢此に至りて忽ち縮す。處々海新田を見る。午飯して發す。此邊小丘相連ると雖も、皆温嶽の餘波に属するを以て、概ね赭山にして雅致なし。愛津村を出つれば一小川あり、之を渡りて

北高來郡に入るに隨て路漸く登る、之を森山峠とす。此間一行盛よ唱歌して過ぐ、喜ぶが如く、怒るが如く、悲ふが如く、憤はるが如く、山岳之によりて震動す。其勇壯快絶ある譬ふるに物あし、覺えず歩を進め、須臾にして嶺頂に達す。遙に諫早灣を目下に見る。之を下れば井牟田村なり、愛津を距る一里半。此に至りて山勢一頓、平野相連る。行くこと二里、小野河内町の諸村を経て、午後二時諫早町に入る。諫早高等尋常小學校生徒、一行を郊外に迎ふ。此日行程七里。諫早家、牛を屠りて一行を犒飲、又當地出身生徒の父兄及び有志者より菓子の寄贈あり。日暮、大幸教授及び篠本講師の引率せる礦物採集生來り會す。

諫早は北高來郡に在り、多良岳の麓に位す。街の西北に城址あり、諫早家の祖竜造寺家晴の築きたり云ふ。城址に高城神社あり、家晴を祀る。社内風景頗る雅、諫早町の公園たり。一宮、諫早は一万石と稱すれども、現石は之より多かりき。戸數凡ろ六百、人口凡ろ三千。此人口數は此地の人の云ふ所に據るものなれども、やゝ少きに失するやの疑なき能はず。三百年來差したる事變あり、僅に鍋嶋騒動、朝鮮事件等に幾分の關係を有せしに過ぎず。

鍋嶋家どの葛藤は、寛延二年鍋嶋家土地を割與すべきことを命令せしに、第三回に至りて之を拒絶せしより起りたりと云ふ。

龍造寺家晴此地を領せしより三代目に諫早家に改め、種々の情實ありて、佐賀の家老格とされり。故に諫早家は龍造寺家の本家あらざれども、血統は之に傳はれるものあり。

八 日

晴。午前六時諫早を發す。天未だ明けず、星斗爛然、露征衣を活し、頗る曉寒を覺ゆ。路漸く山間に入

り、坂路崎嶇。榮田村を経て行くよと一里半、貝津村に至る頃、天全く明く。村外の坂上より大村灣を
目下に見る。已にして喜津村を経を、田畦の間を迂回して行くこと一里餘、古賀村に休む。途中各隊順
次交番軍歌を唱ふ、頗る壯快を極めり。此邊道概ね山麓に沿ひ、次第に坡降をさす。八郎橋を渡り、午
前十二時西彼杵郡矢上村に至る。休息すること三十分、午飯す。此地に矢上炭坑あり、兩三年前の採掘
に係るといふ、規模狭少あり。已にして矢上を出て行くこと半里許、路忽ち海濱に出づ、千々岩灘是か
り。南方遙に天草嶋を見る、渺として烟霞を帯び、海上幾葉の扁舟相點綴し、風景佳絶。須臾よして日
見村に至る、日見峠の峻坂あり、少休して發す。峠に新舊二道あり、舊道は短くして急なり、新道は長
くして緩なり、一行捷路を取る。傾斜甚急にして且崎嶇たり、一行以て意とせず、勇を鼓して上る。時
よ大聲疾呼すれば山岳鳴り、天地震ふ、宛然呐喊して敵壘を乗り取るは觀あり。登行半里餘、絶頂に達
す。嶋原半嶋の光景寸眸の中に集る、眺望甚佳あり。長崎醫學部教員二名已に山上に在り、一行を迎
ふ。休息數十分。

已にして發す、降行半里許、山腹に至れば水道工事の全景悉く目下に在り。水道工事は今夏乾涸以來
縦覽を許さず。此に由りて市内の飲料水不足を告げ、非常に困難を感せりと云ふ。已に降れば醫學部
生徒及尋常中學校生徒迎へ待てり。暫時休息して發す。午後二時半長崎市に入る、諏訪社前を過ぎて
尋常中學校に至る。校員諸君より茶菓の饗あり。次で校舎を縦覽し、終りて着宿す。此日行程七里。

九日

晴。午前六時出發、醫學部よ赴く、浦上村に在り、市を距る一里。醫學部生徒門内に迎ふ、食堂にて茶菓
の饗あり。已にして校舎を縦覽す、教場あり、標本室あり、實驗室あり、手術場あり、病院あり、寄宿舎

あり、皆善く整頓せり。標本室にて尤も衆目を惹きしものは紙塑人体とす。其傍に記あり、今之を左に掲ぐ。之を見れば其物の我國醫術の進歩に與ていかに力ありしを知るに足らん。

此器の精巧なる固より論を俟たず。今を距ること三十有二年、安政四年丁巳、和蘭國醫官ボンペー氏を長崎に聘し、洋醫術を講究す。爾時世人人体剖觀の事を嫌忌し、官規も亦許さず。是に於て紙塑人体を數千里の西洋に購求きて、學生に教授する具とせり、當時此器を用ひて教を受くるもの、摸索搓摩して人体の構造を領知せんとするより、一物にして數人の手に觸るゝこと一日にわらず、自ら此毀損汚垢を來せり。今時解剖術の實物よ提刀するに比すれば、其授受は際隔靴の憾なき能はずと雖、如此器のなき往時に在りては、其醫事に鴻益を與へたる幾許ぞや。試に見よ、今日の有名なる國手先生と稱せらるゝ某々數氏は、皆昔日此器に就て研究せし學生なり。然らば此器之今や己に取故物たりと雖、目下の國手を養成し、醫學の大進歩を致したる、その効實に鮮少に非ざるあり。亦以て當時の一斑を見るに足らんか。

己にして辭して還る。醫學部生徒復た門内に整列し、萬歳を唱へて一行を送れり。十時長崎港大波止場に着し、一同乗船し、先づ我捕獲軍艦操江號を覽る。船員善く説明の勞を取れり。將に去らんとする、一行乃ち萬歳を唱ふ、坐ろに我海軍當日の偉功を追想せしめ、感慨措く能はず。次で造船製鐵所を巡覽す、其規模の廣大なる殆ど之を筆すべからず。己にきて檢疫所に至りて晝食す、休息少時、此より一行二手に分れ、一派は水雷布設の景況を觀、一派は英國東洋艦隊旗艦センチュリオン號を見る。長崎港口水雷布設隊本部は高鉾嶋に在り、海軍御用船筑後丸特に嚮導の勞を取れり、須臾にして嶋岸に着す。上陸して本部に至れば、水雷術長海軍大尉森儀一郎氏先づ水雷に就き詳細ある説明を與ふ。其

大意に曰く。

水雷の始まりしは遠し、現今我國の水雷は、法を英國より取れり。水雷に二種あり、攻撃水雷、防禦水雷即ち是なり。攻撃水雷には魚形水雷を用ひ、防禦水雷にはマインを用ふ。防禦水雷は必ず海水の深淺、潮流の緩急に由りて其種類を異にす。又防禦水雷は電氣的のものあり、器械的のものあり。電氣的の水雷は甚だ危険にまて、一たび之に觸るゝ時は船艦直ちに粉粹すべし。故に敵艦を防ぐに妙かれども、其他の船艦に取りては至て危険あり、故に成るべく之を用ひざるを可とす。器械的水雷と安全にまて、電池の方を用ふるものあり。目下長崎港口に布設せるものは此電氣的水雷にて一名浮標水雷といふ。故に不測の患を防がん爲に、特に嚮導船を置き、晝間船艦の出入には必ず之を安全の地に導き、夜間出入の時は信號を得たる後其船艦を導く。浮標水雷に五百斤の火薬を用ふるは、深海に布設せるものに限る。又水雷破裂範圍内にあるもの悉く破壊せらるゝは實驗に徴して確實なりとす。浮標水雷は圓筒形をなし、其横斷面は半徑を危害半徑と稱す、若し之に三百斤の火薬を用ふる時は其半徑は三百フメートルとあり、若し二百五十斤を用ふる時は二百五十フメートルとある。凡て防禦水雷は必ず三列若くは四列に布設するを常とす、其の第一列を第一線といひ、第二列を第二線といひ、順次に第三線第四線等と稱す。各水雷間の距離は一定せり、二百五十斤の火薬を用ひたる時、其距離八十ヤードを常とす。又防禦水雷に二種あり、一は敵艦の水雷に觸るゝ時自然に爆裂するもの即ち自擊水雷あり、一は敵艦を狙撃するもの即ち試擊水雷あり。而て後あるは之を海心に用ひ、前あるは之を沿岸に用ふるを常とす。目下當港にある水雷隊は總員七十名にして、高鉾島は十名あり云々。

其他長崎港口に布設せる有様等を示したれど、事少く機密に關するを以て憚りて之を記さず。之より嶋上の營所に至り、電池の構造及試撃器械を巡覽る。高鉾嶋は長崎港口出入の衝に當り、全港を目下に見る、尤も形勝の地たり。水雷本部の此嶋に設けらるゝも亦偶然ならざるあり。已にして山を降れば、忽然海心暴發、水沫天を衝くを見る、是れ水雷發射の實驗を試みたりしあり。一行乃ち快哉を連呼して止まず。忽ち幾艘の漁船飛ぶが如く遠近より來集するを見る、これ水雷破裂の際、海魚の皆死して浮べるを捕へんとてあり。手網を持ちて狙ふものあり、將に得んとして逸するものあり、蒼皇衣を沾はすものあり、其混雜名狀すべからず。已にして海軍萬歳を唱へて歸途に就く。水雷部より特に其海軍用船筑後丸をして之を引かしむ、瞬時波止場に着す、時午後五時、日已に西山に没す。此日港内淀船の船艦は帝國軍艦操江を始とし、英國軍艦四艘あり、港口には帝國軍艦鳳翔あり、商船には我東京丸を始とし、パラス、ダフチエー等の諸大汽船、天橋丸、シヤンテル、ポルトラント等の諸帆船あり。其他大小の和船數百艘あり。危檣林立、涼笛相應じ、其盛觀言はん方なし。已にして宿に歸る。尋常中學生徒より菓子數千個尋常師範學校職員より餅數百個を贈る。

長崎は三方山岳を環らし、西方長崎灣を抱く灣深く浪穩あり。二百年來外國貿易絶ゆるとなく、本邦第一の港灣と稱せられ。船舶輻湊、來往の頻繁あること吾人をして喫驚せしむ。

長崎はもと深江浦と名く。極西偏陬に位し、民僅に田圃を耕ま、海濱に漁し、以て生計を爲す。過ぎず。元弘三年長崎勸解由左衛門兵亂を避けて來り、偕に此地を領す。其十二世の裔甚左衛門頼純の時、氏に因りて更に長崎と名く。永祿元年明人、大船に許多の貨財を載せ來りて交易を求む。數旬の後、事京師に聞ゆ。將軍義輝公小嶋備前守に命じ、其事を監せしむ。小嶋氏威を振ひ、毫も憚る所な

かりしかば、長崎氏之を恨み、夜襲うて之を殺し、筑後に奔る。此時に當りて長崎邑主を殺し。元龜元年蕃船始めて來り、斯に交易場を定む。全二年有馬修理大輔、大村理專長崎の邑長と議し、街衢を建つること六、以て交易に便あらしむ。爾後蕃船歲毎に來り、四方の商賈群集し、日に塵鋪を構ひ廿三街とあり、終に繁華の區とあれり。是に於て蕃人の耶穌教を奉ずるもの、自ら寺觀を建て之に居り、傳教至らざるなく、人民發感す。彼等は終よ長崎の地を以て私有地とするよ至れり。天正十五年豊臣秀吉公、九州征伐を終へ凱旋せる時、命を發えて耶穌教徒放逐を斷行し、鍋島氏、寺澤氏相繼で之を治む。文祿元年村山東安豊臣公の命を受けて、更に數十街を建て、共に八十街とあす。慶長八年家康公改めて鋪府を置く。寛永十八年東西兵營を置き、以て邊寇に備ふ。爾來盛衰あきにあらずと雖も、常に外國貿易の中心とありて、開國の時期に至れり。

十日

晴。例時出發す。路を西山峠に取る。醫學部職員諸氏及び尋常中學校職員生徒送りて西山郷に至る。峠を越え、西浦上村に出つ、此邊山岳重疊、坂路相望む、且其間道あるを以て、乱石凹凸頗る歩行に苦む。然れども四面の山岳已に深く秋色を帯び、霜葉爛斑、花よりも紅なり。行くこと二里、長興村に休ふ。一の峠あり、松戸峠といふ、傾斜頗る急あり、衆勇を鼓して昇る。嶺上青松直立數十間、並行丁餘、路其間を通ず、颯颯たる松風塵耳を洗ひ、襟懷之に由りて洒然たり。下ること里許、路山麓を迂回す、之を過れば遙に海を見る、須臾にして伊木力村に着す、海濱の一村あり。八艘の和船已に曠して待てり、休憩少時にして乗船す。舳艫相含み、大村に向て發す。時に風急に波高し、舟子風に乗じて帆を擧ぐ、船駛すること矢の如し。大濤時よ來りて船に當れば、水沫亂飛、舟中の人皆濕ふ。時に波間白鷗の浮ぶが

如きを見る、眸を凝して之を覩れば、是れ大村尋常中學校生徒の、端艇を舫せて一行を迎ふるあり。午下一點鐘大村に着す。直に尋常中學校に至り校舎を覽る。偶々平戸猶興館生徒數十名も亦來りて此地に在り、初めて相會せり。已にして舊城址に至り、大村神社に謁し社内を縦覽す、眺望甚佳あり。

社内に貝吹石と稱するあり、圓形にして大小二個の穴あり。小あるものを吹けば、螺貝の音を發す。天正年間、龍造寺隆信壹瀨の邑を襲撃する時、全邑の郷士等祖先丹後守純忠の命を奉じて、全邑の城砦に籠り隆信と戰うて之を退く。此際此穴を吹て合圖の陣員に代用せりと云ふ。

境内東隅に石碑あり、碑は大村神社紀功碑にして、陸軍大將兼參謀總長議定宮大勳位熾仁親王篆額を刻せり、大村家の起原、歴代勤王の事蹟、及び大村神社の來歴を略述しあれば、茲に之を掲ぐ。

大村氏出於大職冠鎌足之裔、藤原純友經年九百、累世三十一、而列縣社祀典者七公、曰遠江權守親澄、曰丹後守親澄、曰伊豫守澄宗、曰彈正少弼澄遠、曰彈正少弼純興、曰紀伊守純弘、曰從三位純熙、純友爲伊豫祿、居大洲、與其子諸純、共死于天慶之亂、其孫直澄生甫三歲、士民擁負、匿於山中、而免焉、永延中、叙從五位下、治肥前國藤津彼杵高來三郡、居彼杵郡大村、因氏焉、是爲大村氏始祖、文永十一年、直澄八世孫親澄、與子澄宗禦元寇於筑前博多、及其再侵、又逆之壹岐瀨戶浦、防戰甚力、鎌倉府賜功狀賞之、元弘之變、澄宗之子澄遠、其子純興、與菊池武時謀、出兵于兩肥二筑與少貳大友諸氏戰、終始勤王、純興子爲純弘、當是之時、楠新田北畠名和、及九州勤王諸將、相踵戰沒、官軍不振、公孤立介于敵地、尙承父祖遺志、協力菊池氏、奉懷良親王、抗足利氏大軍、屢破之、既而南北講和、事全平矣、純弘十九世孫純熙、弘化四年襲封、其地瀕海、且接長崎、外船屢至、事或不測、公常憂之、乃築礮臺、革兵制、大修武備、養士氣、時幕政衰頽、開鎖論交起、公慨然持勤王之義、欲

待時而發矣、慶應三年正月二日夜、重臣某、及教官某、俄遭刺殺、事出于幕府黨之手、捕而戮之、士氣益振、會時事孔棘之報、自京師至、於是發精兵、與薩長等諸藩兵衛京師、明治元年、伏見之役、我兵防逆徒於大津、遂收桑名城、尋爲東海道先鋒、先是公聞變上京、天皇召見、賞其功、因命助九州鎮撫總督、衛長崎、乃分手兵于東海道、戒備遣之、輕裝西赴、四月、我兵入江戶城、東台之役、力戰、又出以討上總武藏之餘賊、連戰皆克、六月、王師向陸奧、我兵海路、上常陸平瀨、援泉及磐城平二城、進至三春、降旗已建、我援軍亦來會、勢大振、沿道轉戰、遂入會津、與諸藩兵共圍若松城、時出羽逆徒類猖獗、官軍僅保角館、公迺在藩、奉密勅、從海路出兵援之、九月陣于刈和野、劇戰連日、逆徒絕跡、若松城亦降、東北悉平、是役也、我兵每戰、賜功狀、前後十數次、二年六月、勅賜世祿三萬石、三年、公叙從四位、十五年、超從三位、初大村氏祖廟在玖嶋城北池田、號常盤社、廢藩之際、士民請捐資、遷之城址、公喜其地高尚、而有山海之壯觀、許之、不幸未成而薨、嗣君從四位純雄克繼其緒、新營殿宇、安七公之靈焉、十六年冬、改稱大村神社、躋爲縣社、二十四年夏、朝廷追思父功、陞叙伯爵、於是勤王之功益顯矣、又設一社於側、合祀累世諸公之靈、正隆謹撰之序、系以辭、辭曰、美哉山海之勝兮、祠宇輪奐、神靈之所託兮、士民之所戀、家訓有灑兮世忠盡、積善流芳兮、孝道亦見、嗟夫三位公兮功最冠、會王室之式微兮、當時事之多難、協心雄藩兮、竭力翊贊、君善謀兮臣善戰、平叛亂兮酬天眷、賜功狀兮祿三萬、聖鑑照餘烈兮、陞爵受重煥、守先世之遺風兮、容士民之志願、建貞珉兮勤銘讚、肥海接天兮浩漫漫、永鎮邦家兮無邊患、

明治廿五年三月中院

從三位勳一等 楠本正隆 撰文

此日大村町に宿す、行程六里。大村尋常中學校職員生徒より菓子果物を、當地出身の學友父兄及有志

者より鮮の寄贈あり。

十一日

晴。午前五時半出發す、天未だ明けず、曉星煌々たり。尋常中學校職員生徒一行を郊外に送る。行くこと一里にして東方漸く白む、頗る曉寒を覺ゆ、竹松村に至り天全く明く。左よは鯛の浦あり、蒼波沓々、右には連山重疊、延て多良岳とある、此間平野少く相交り、秋曉殊に清し。會々平戸猶興館生徒尾して來り、一行を過ぎて行く。須臾にして日多良山上を上り、光輝爛然人目を眩す。行くこと一里許、福重橋を渡り、福重村に入りて休ふ。聞く此邊一帶旱魃殊に甚く、細民の困難言ふべからずと。此より以往路概ね海に瀕し、風景極めて妙なり。松原千綿の諸村を經、午前九時彼杵町に入る、大村を距る五里。行くこと一里、大音琴村に至りて休し午飯す。村端に二丘あり、前方鯛の浦に面す、眺望極めて佳なり。日光海を射て銀波渺々、遙に海を隔て、遠山靄を帯び、淡濃相連り、水光山色相映じ、風景絶妙なり。已にして發す、又行くこと一里、川棚橋を渡る。此より路漸く山間に入り、坂路漸く斜なり。一里餘、行きて一嶺を越え、再び海灣を見る、宛然湖の如し、之を小串灣とす。灣内半嶋突出し、小島相並び、松樹鬱然たり、扁舟二三其間を點綴し、風景畫圖の如し、小串村を經て行くこと一里、山漸く深く、一長嶺あり、椿谷越といふ。半里余盤屈して絶頂に至りて休す。之を降れば宮村あり。山漸く開け、路田畦の間に通ず。廣田村を過ぎ。又一里餘行きて、早岐町に入る。夕陽已に林梢に在り。此日行程十里、一行頗る疲る。當地出身の生徒澁谷富貴三氏一行に菓子を贈る。

早岐は人家凡そ二百、河畔に在り。早岐瀬戸甚だ狭く、宛然一大河流の如し。背後颯々たる山脈を負ひ、前面針尾嶋に對す、風景愛すべし。

十二百

晴。例時出發、曉寒甚し。路海岸に沿ふ、行くこと一里餘にきて、漸く山間に入る。日宇村に至りて休息す。此地石炭を産すと雖ども採掘盛ならず、且つ概ね粉炭あり。又行くこと一里にして一坂あり、之を登れば鎮守府所轄の墓畔に出づ。黃海戰役の諸士新に此處に葬らる、乃ち行て吊す。墓地は丘上に在り、彼の名譽の戰死を遂し坂本少佐の墳壟之其最高地にあり、紅白の旗、猶片々風に翻へるを見る、一行愴然、懷舊の感に堪へざるものあり。參拜了りて總代秋月胤繼祭文を讀む。已にして去り本道に出づ、遙に佐世保海灣を目下よ看る。降行里餘、午前九時佐世保に達す。助教授三池全津氏來りて一行を郊外に迎ふ。氏は陸軍豫備軍曹たり、本年八月徵集せられ、來りて佐世保に駐在せるあり。一行直に海兵團に至り、兵舎、鍛冶工場、木工工場、機關、掌帆、掌砲、水雷の諸倉庫を巡覽す。皆善く整備せり。同團にては一行を優遇し、特に軍樂隊の催あり、奏樂數曲、君か代、教育に關する勅語、英佛獨の國歌、其他勇壯ある進軍の賦等あり。已にして兵舎の樓上にて午飯す。偶ま千嶋探檢を以て有名ある郡司大尉、徵集せられて此府に在り、由て談話を請ふ。大尉直に之を諾し、一場の慷慨奇拔ある演說あり。言語明晰、皆肺腑より出づ、衆感動せざるなし、其大意は載せて本紙にあり。

右了りて海兵團を出て、衣糧倉庫を見、續て砲彈水雷倉庫を見る。魚形水雷及三十二珊の砲彈の如きは尤も衆目を惹けり。又豊嶋海戰にて分捕りたる小銃等を見ることを得たり。已にして觀覽全く終り、午後四時着宿す。

佐世保鎮守府は、佐世保灣頭、佐世保川の注ぐ處にあり。西北に正觀、田島、弓張の三岳を負ひ、西に其分岐せる山脈を以て九十九島灣と相隔り、外艦灣内を測る可らず。灣口向後崎は、西方に開き、至

て狭く、灣内は水深く、波穩かにして天然の形勢を占む。嘗て軍港撰定の際、此港は平戸の薄香灣及び伊萬里の楠久灣と共に調査せられ、終に此に鎮府を置くことに決定せられたりと云ふ。以て其樞要の地たるを推知するに足る。海兵團最も西に位す、高樓の正面よあるを將校室と云、其北なるを新兵操練所とし、南なるを兵室とす。室房の結構盡く軍艦に擬せり。海兵團の西方に在る丘陵に鎮守府司令部あり、前面の被服倉庫及び病院と相對して甚壯觀あり。海岸には石炭貯蓄所、製造所等あり。何れも規模の宏大なる驚くべきものあり。

十三日

曇。例時出發、曉寒稍輕し。半里にして天漸く明く。北松浦郡大野村に入りて休む、此地にも亦炭坑あり、皆瀬村を經て行くこと三里、佐々村に休む。此邊、山岳連亘、坂路縱横、且道路新開、砂礫凸凹、歩行にいと苦めり。佐々村に入りて、山忽ち開け、平田相連る。途中細雨少く降る。口石高等小學校に至りて休む、村内有志者及學校員より饅頭二千五百個を贈らる。此處にて晝食す。發するに臨み學校長告諭する所あり。曰く、

行程既に半を經過し、諸子の見聞觀察せる所も、亦た少からざるべし。殊に長崎、佐世保に於て得たる効益最も多からん。彼の長崎に於ける捕獲軍艦操江號觀覽の如き、布設水雷試験の如き、東洋最大と稱せらるる英國旗艦、一覽の如き、佐世保に於て軍港の狀況を觀察し、有益なる軍樂隊を聞き、有名なる郡司大尉の千嶋談を聞きたるが如き、諸子を益せしこと幾何ぞや。殊に諸子は佐世保に於て、衣糧、砲彈、水雷等の倉庫を巡覽して、戰時必要品の一般を窺ひ、戰爭準備の繁多なることを認知したるべし。然れどもこはその幾萬分の一に過ぎず、實際は到底想像の及ぶ所にあらずと知るべし。

世人は口を開けば即ち曰く、我が國光を中外に發揚せよと。抑之を發揚する方法の如何に至難あるかの問題に至りては、之を顧みるもの少なし。余は信ず、教育こそ最も必要の方法なれ。凡る國家は國家的觀念ありて、始めて之を維持するを得。國家觀念を養成するものは、教育を指て他に之を求む可けむや。その教育の必要あること知るべきあり。今や我國は戰へば勝ち、攻むれば取り、實に破竹の勢にて進めるは、是れ我が 皇上の威靈に由るとはいへ、抑も亦た我同胞の確乎たる氣象と國家的の觀念とに由るにあらずんばならず。諸子は現に高等の教育を受け大に修養する所あれば、他日必ず社會に立ちて幾千萬人の統領たらざる可らず、諸子の任重くして大ありと謂ふべし。諸子よ、愈々國家的の觀念を養成せ、益々之を擴張し、以て我が國光を宇内に發揚せんことを勉めよ。已にして發す、軍歌盛に起る、一行覺えず歩を進む、須臾にして佐々川橋を渡る、此より山益々深く、路益々登て江里峠とある。之を越えて江迎川の上流に出づ。此邊の山嶺概ね奇岩に富み、岩上青松鬱然、風景殊に佳あり。俗に小耶馬溪の稱ありといふ。川に沿うて降る。行くこと一里餘にして江迎村に達す。此邊一帶の地石炭に富み、處々に採掘するを見る、然れども概ね粉炭にして其用廣からず、惜むべきなり。此日行程七里。江迎村有志者より饅頭、果物數百個を贈らる。

十四日

晴。例時出發す、曉寒強し。海に沿ひ行くこと十數丁にして一山を攀づ。海水遠く灣入し、宛然長湖の如し。遙に西方を眺むれば、五嶋の一嶋、煙波縹渺の中に在り、風景絶佳なり。之を越えて田平村に入る、嶺上赭丘連亘し、宛然阿蘇高原の趣あり。已よして坂漸く開け、路田間を通ず。行くこと二里、一坂

を下れば忽ち海濱に出づ、平戸嶋眼前に在り。小手田村を経て波止場に至れば、平戸有志者、船十三艘を曠し、各船「歡迎」の旗を建て、一行を迎へて待てり。乗船す。須臾よして平戸に着す。山川北松浦郡長、松浦猶興館長、及其職員生徒來りて波止場に迎ふ。直に猶興館に至りて休憩す。茶菓の饗あり。尋で校舎を巡覽す。校内に學館の沿革記を掲ぐ、教員井上寅之助氏の撰あり、左に之を掲ぐ。

寅聞之、學校者、所以範圍人心而經緯國家之具也、蓋學校之興廢、風俗之隆污判焉、風俗之隆污、國家治亂之機決焉、是故賢君明主、無不用力於學校、以爲圖治之地矣、吾舊平戸藩、僻在西陲、風俗朴直、氣俠相尙、以此士人往々不免有粗豪慥悍之病、藩祖天祥公、有見乎此、乃延山鹿素行先生、講習文武、然未及建學舉、識者憾焉、至豐功公、創建學校、名曰維新館、公時親執經藝、誘掖後進、於是文教始興、長村內藏介、白石祥三郎諸老、斐然輩出、一時稱隆盛、內藏介師事皆川淇園先生、祥三郎則出於龜井南溟先生之門、其學雖不能無異同、彬々亦可觀矣、及觀中、諦乘二公之世、葉山左內參藩政、執學柄、其學出於佐藤一齊先生、今幹字公之在儲位、亦就一齊先生及大橋訥菴先生學焉、及襲其封、首擢先師楠本確藏、日開講會、以明聖賢之道、先師初師一齋、後唱閣齊山崎氏之學、故公意亦專嚮於此、使先師兼藩學教授、以大釐革學制、勸誘獎勵、無所不至、於是公賢明、與先師之學德相遇、而治國之具始備、闔藩子弟、亦知學之不可以不講明、將以大有爲、而世局一變、公歸東京、學館亦隨廢矣、既而士人、放縱肆侈、漸喪恒心、甚則有父子兄弟、爭訟顛越、以絕祖業者、明治庚辰歲、公來省墳廟、見風俗汚顛、乃察其所由、欲再興學舍、以維持之、捐賞葺一字、名曰猶興書院、復囑先師、講仁義之道、寅亦助之、居數年、先師罹疾、其弟謙三郎代司教導、無幾亦歸故山、而書院之講學遂廢矣、公尙以爲不可已、命松浦縮藏、安藤藤二、以其舊舍、充授尋常中學校之所、改稱猶興館、以藤二爲之長、丁亥歲、又相地其傍、明年

新館始成、以舊舍爲學生寄宿所、先是藤二夜、縮藏代之、嗚呼公之用力於學校、可謂至矣、今茲辛卯七月、公復來此、會學生徒卒業式於館中、公親臨之、留數日、命寅記平戶學館沿革之由、寅不敏、何敢當之、然從事於此學者、二十餘年、今又備員館職、略知其興廢顛末、因記其梗概、以誌後進、抑方今天下地無無校之郡邑、家無不學之子弟、而其所講習、專在科藝、相競相誇、以儼顯榮、而心術行爲之際、狗私違義、遂以污其風俗者、比々皆然、吾願子弟之受業於此者、能察公之所以設斯館、而各立爾志、明仁義之道、行忠孝之事、兼修科學、則其有補於風俗之汚隆、國家之治亂、豈鮮少乎哉、

已にして龜岡神社に參拜す。
社は舊城内よりあり、藩祖を祭る。寶物を觀ることを得たり、今其内の重なるものを列擧すれば次の如き。

寸斷の錦 後醍醐天皇の御し給ひし紅袴を寸斷して、將士に配ち賜ふ時、松浦肥前守定も亦た之より與かる、是れ其物ありと云ふ。松浦家これを最も鄭重に保存し、世襲財寶の第一とす。

七郎神社御佩劔 神功皇后征韓の際、供奉せし七郎親王之を佩び給ひしかりと云ふ。長さ及び巾は普通の劔と異なることなし。櫛の一端は環狀を爲え、鞘は竹にして皮を以て之を蔽ふ、鏢は角質にして紡錘形を爲え、櫛にも角を以て卷ける所あり。或は韓土より分捕して歸られたるものなるべきか。猶考ふべし。

松浦肥前守鎮信佩刀 法印公は勇武英邁の將にして、南船北馬軍務を執る。此二刀は公の佩びしにて、相州廣次の作なり。

光格天皇御褥 天明十四年三十三世松浦安靖公に下賜し給ひしなりとぞ、御縁あることを示され

んとてなり。後年松浦家より奉納せらる。方二尺六七寸、中央に二重菊花あり、周圍に四寸許の縁ありて、中間には菊葉の飾あり。至て質素よし、拜覽するにもいと畏おし。

兩國の弓 源三位賴政鶴を射たる弓なりと云ふ。和漢に比類あしと云ふより名つけしあり。廿五世松浦道可公征韓の役に留守し、豊太閤屢書を寄せて糧食の運輸を掌らしむ。公功あり、嘗て聚樂城にて秀次に謁せし時、秀次、公の武功を賞し、この弓を贈りしとぞ。

鄭氏の鼎及び印 平戸城南鄭成功の古址あり、此地に之を得たりと云ふ。印は鄭氏と記せり、巾一寸、長一寸五分。

名和長年の兜 如何にして松浦家の所屬とありけむ、判明ならずと云ふ。裏面に伯耆守長年と刻り。

鯖尾纏及びいろは纏 是れは法印公及び泰岳公、朝鮮の役で使用したるものにして、旗下の馬印あり。前かると鯖魚の尾鱗に擬し、後あるは『いろはにはへと』の七字を記し、共に六七尺あり。

此外彈藥入、阿蘭陀銃砲、陣太鼓等の分捕品及び御用船旗、大友義鎮鎧等珍奇あるもの尠ならず、今は之を略す。

已にして着宿し、武裝を解き、白岳に登らんとす。行く手に阿蘭陀塀、阿蘭陀井戸、阿蘭陀石垣等あり、一見す。皆昔年蘭人の築堀せしものありといふ。白岳は平戸島の北端に在り。市を距ること一里、直立數百尺、岳上極目際あし。對壹二州遙に西北に横はりて、水天一髮、渺乎として雲を帯び、玄海洋は天に連りて烟水清遠、東方肥筑の諸山連亘逶迤とて列障の如く、南は遙に御値賀嶋を煙靄の中に見る、生月、大島、度嶋、鷹嶋の諸嶋も、皆眼下に羅列し、歴々數ふべし。眺望極めて佳あり、殆ど應接に暇

あらず。岳上に白岳社あり、遊眺時を移す。已にして下る。神崎村民特に歓迎の意を表し、夥まぐ蹲鴟子を蒸えて、一行を岳麓に饗せり。此日平戸有志者大に周旋する所あり、殊に薄香灣にて引網を催し、一行の觀覽に供す。大小の鯛魚活潑々として群がり、獵獲算なし、亦奇觀なり。已にして獲たる生魚を割烹して宴を開く、宴席は灣口に設け、幕を廻らす。酒酣ある時、山川郡長起ちて一應の挨拶を述べ、天皇陛下、第五高等學校の萬歳を三呼し。衆皆之に和す、聲山岳に轟き、時ならずして雷す。極めて快絶。已にして杯盤相雜り、歡呼の聲湧くが如し、須臾にして一行愛を割きて歸る。別るゝに臨み我學校長は、天皇陛下、猶興館、平戸有志者の萬歳を連呼し。衆之に和す。宿に歸きば、時辰五時を報ず。平戸有志者より菓子果物數多寄贈せらる。

松浦家は嵯峨源氏左大臣融より出て、渡邊綱の後裔あり。八世松浦久檢非違使に補せられ、肥前松浦郡宇野御厨檢校と爲り、延久元年西下す。因て氏とす。松浦彼杵二郡及び壹岐を領す。梶葉を徽章と爲すは、此時肥前今福梶谷よ居たれば也。十一世照山公持に至り、平戸に移る。今平戸城址の西、館山と稱する所即ち其宅地あり。十五世肥州公定は、後醍醐天皇に事へ、勤王の事蹟あり。尊氏行在を犯し、時、公之を撃ちて、大に破る。帝吉野に崩するに及び、兵氣沮喪す、然ども公終始その節を變せず。大内義興檄を諸將に傳へ、前將軍義植を京に納んとする時、松浦興信之に赴き、細川澄元と戦ひて功あり。法印公松浦鎮信は、大閩征韓の際、宗義智と共に、大坂城に召されて、幕議に參し、文祿元年三月、小西行長に属して先鋒とあり、海に航じて韓地よ入り、諸城を拔く。殊に忠州を攻め、平壤城を陥れ、明兵を却けたるが如きは、其功勞の大あるものとす。後屢々行長を佐けて無事歸國するを得たり。諸將相語て曰く、『義智の勇、鎮信の智あかりせば、行長豈に名譽を博するを得ん

や」と。公の謀慮深遠ありしを知るべし。慶長四年公平戸龜岡に城つき、舊城より之より移り居る。維新の後、龜岡神社を奉祀し、松浦家累代の靈と素盞鳴尊とを祀る、境内老樹蒼鬱、街衢海灣を環らし、閑雅掬すべし。泰岳公松浦久信も亦た渡韓して功績少からず、靜山公松浦政信大に文教を開き、士風一變し、治績日に擧る。元治慶應の間、勤王の議起り、諸藩騒然たり、松浦公は藩士を訓諭して、忠誠以て王に勤めしむ。

足利氏の中頃明船來て交易し。蠻船も亦た鳥銃等の珍器を載せ來りて互市を請ふ。船中切支丹の僧あり、其教を播んとす。松浦隆信らの邪道あるを知り、之を拒絶し、唯だ齋らし、鳥銃を購ひ、邑人をして用法及び製作の事を學ばしむ。又佛郎機巨礮を得て、之を城中に置き、以て防禦に備ふ。天正八年英人始めて來る。慶長十三年蘭船及び英船來り舶し、爾後蘭人等平戸に住し、邸宅を構へて貿易を營むに至る。貿易港は平戸灣にして、當時は港灣非常に深かりしと云ふ、海岸の石階現今殘存せる者の下に、更に十八段ありたりと云ふ、以て之を知るべし。幸橋の傍に松樹あり、當時蘭船を繋ぎしものなりと云ふ。黒子嶋は城東崎と相對立し、港灣の北門を扼す、崎の一帶は潮水侵入を防禦爲めに太石を疊めり、是れ蘭人の築きしありといひ傳ふ。黒子島、稗田城東崎等の砲臺、阿蘭陀塀、阿蘭陀井戸等の工事を見れば、當時平戸と蘭人との關係何如の一斑を知るを得ん。蓋し西洋建築術の輸入は實に平戸に始まりしものと謂ふべし。平戸貿易日に盛なるに従ひ、松浦家の豊富勢力益々盛なり。幕府之を知り、終に寛永十八年に至り、蘭人の平戸に居るを禁じ、長崎に留めて、濫りに出入することなからしむ。毎歲夏に來港し、秋に至りて出帆せりと云へば、其後從前の如く自由に貿易行はれざりしとみゆ。

平戸は外國との貿易の中心ありしかば、耶穌教との關係も亦た淺しとせず。現に其舊跡いと多かり。抑も松浦藩は耶穌教の傳播を嫌惡すること甚しく、一方に於ては之を嚴禁し、一方に於ては奉佛の主義を確立し、代々佛教を尊信して怠らざりき。故に平戸に於ける耶穌教嚴禁は遙かに幕府の處置より先に行ひえあり。初め松浦家耶穌の金像を藏せしを、幕府命じて之を長崎に致さしむ。之を繪畫よ寫し、所謂踏繪の一種を造る。是に於て松浦藩にては宗門奉行をして之を長崎よ借用せよめ、法によりて士民に踏ませ、疑ある者は各々刑に處したりと云。切支丹教徒は西方の沿岸に多く住み、生月嶋、獅子村は殊に甚しかりけむ。獅子村には俗に切支丹山と稱するあり、當時の舊跡ありと云ふ。

切支丹は大友小西等の諸氏とは淺からぬ緣故ありしが、松浦家は毫も之に關係せざりきといふ。同家の藩士籠手田某は、耶穌教徒ありしとぞ、實は砲術を傳習する手段として、之を信仰せしものにして、後其術を獻じ、自ら罪を負うて割腹したりと云ふ。是を以て籠手田の氏名は斷滅せずまで今に至れり。大村氏は耶穌教に關係せし故、松浦家の大村氏と婚せし時は、輿向にて邪宗流行すと風評せられ、之に因りて訴訟起りしことあり。此事は宗陽公隆信の時代にて、松平伊豆守老中の時ありしが、私怨ありとて却下になりしとぞ。

又隆信は幕府の特命を奉じ、長崎に赴き、諸將と共に耶穌の寺塔及びその肖像を毀壞し、其徒弟を南蠻に放ち、子遺なからしむ。寛永十四年天草の匪徒叛して有馬氏の故城に據る、幕府天祥公松浦鎮信に命じて長崎を護らしめたり。此時鎮信は一隊を有馬よ分ち遣して板倉内膳正重昌の麾下に屬せよめたりと云ふ。

現今に至りても嶋内耶蘇教徒多し、聞くに彼等は平戸の人にあらず、概ね他より移り住せるものにて、島人の嫌悪を受くる傾向ありと云へり。

十五日

晴。例時平戸を發す。猶興館職員、生徒及山川郡長波止場まで來り送らる。小手田に至り天全く明く。曉寒殊に甚し、板橋の霜は銀砂を鋪くに似たり。是より以往、峯巒宛轉、連綿として絶えず、坂路相續く。田平村に至れば尋常小學校生徒路傍に整列して一行を送れり。行くこと二里、御厨村に休む。遙に玄海洋を望めば、海波平穩、孤帆遠く懸りて白鷗の浮ぶに似たり。壹岐の嶋は水天一色の邊に在り。風景極めて佳かり。行くあと一里半、志佐村に至れば、高等小學校生徒整列して一行を送れり。川調村に至りて休む。此邊石炭を産すも是概ね粉炭にして其用廣からず。已にして榎山峠を越えて行くこと一里半、午後二時今福村に入る。海濱の一大村なり。此日天氣快晴、風日暄和頗る暑を感ず、一行大に疲勞を覺えたり。今福村有志者より鮮一臺を贈りて一行を犒ふ。この日朝、大幸教授篠本講師礦物採集生を率ゐ、本隊に離れて、西の嶽に登れり。黒本助教授も之と同行せり。

今福は人口一千餘、鷹島は其近海に横はり、元寇の根據せし處なりと傳ふ。一説に玄海島を根據地としたりとも云ふ、果して何如にや。又小嶋は慶長以來、耶蘇教隆盛するを以て著名ありとす。隨て禁ずれば隨て盛なりと云ふ。

十六日

晴。午前七時今福村を發す。北松浦郡書記某一行を送り來り、郡界に至りて別れ歸る。此邊の路或之山間に入り、或は海濱に沿ひ、山光水色相連り、風景明媚、旅情を慰むるに足る。立岩、久原の諸村を經、

楠久村に至りて休む。此地に石炭坑あり、一行之を見る。坑主東嶋氏より果物數百個を贈らる。

東島氏所有の炭坑は長者炭坑と云ふ、其話に去年四月より開掘し、獨力を以て今日の盛況を致せり。日に二百三十噸乃至二百五十噸を産出す。日清戰爭以前は三分の二を海外に輸出せしが、今は悉く郵船會社の用に供す。炭脈廣大にして將來に望ありと云へり。

行くよと半里、里村に休み午飯す。村役場より蜜柑數百個を贈らる。已にして發す。此邊、玄海の水深く灣入して楠久灣をなし、大小の嶋嶼灣内に羅列し、多くは青松鬱然たり。里村に鹽田あり、廣さ十數丁、佐賀藩祖鍋嶋直茂公の始て規畫せし所なりといふ。此より路漸く田間に入り、山野の景は深く秋色を帯びて甚佳あり。然れども快晴連日、秋暑烈しく、歩行頗る苦む。午後零時四十分伊萬里町に入る。此日行程五里。此夕礦物採集の一行來り會す。

伊萬里は人口壹萬に達す、大廈高樓軒を並べ、一見此地の繁盛を推知するに足る、實に北海岸の商業地あり。海深からざれば、西北に楠久灣を控えて波穩かに、風激しからざれば、古來船舶は之に輻湊せり。昔時平戸港を出帆する船は、先づ白岳にて晴天を觀測し、直に此港に航し、更に唐津、博多、馬關等に至りしと云ふ。當時貿易の樞要に在りしを推知すべし。此地専ら有田皿山の陶器を販賣す、因て有田燒を俗に伊萬里燒と稱す。

十七日

晴。午前五時伊萬里を發す。月明にして地白し。行くこと一里半、西松浦村に休む、天漸く明く。松浦川を渡り、杵嶋郡に入る。路左右に別る、左は福岡に通じ、右は佐賀に通ず。右路を取りて行く。若木村を經行くこと二里、川古村に休む。此邊、山岳相連り、此に至りて勢縮し、遂に川古越の難坂とある。之を

越ゆれば小城郡あり。午前十時板屋村に休む。伊萬里を距ること六里、此地大根を産せるを以て名あり。午飯して發す。

多久村を経て長尾村に休む、多久は郡内の大村あり。時に日巳に中し、歩頗る熱す、且快晴連日、塵烟四に起り、殆ど窒息せんとす。多久川を渡りて行く、別府村に休む。村外に一坂あり、肥筑の山勢此に至りて盡く。此より以南は原野廣濶、極目際を、所謂筑後川の平野是あり。道路平坦砥の如し。行くこと一里にして、午後二時小城町に入る。小城高等、尋常の兩小學校職員生徒一行を郊外に迎へたど。此日行程八里半餘、一行倦色を、其の勇健あること驚くべし。町内有志者より饅頭數千個を贈らる。

小城は維新以前は鹿嶋、蓮の池と同じく、鍋嶋家の支藩たり。戰國の時代、鍋嶋氏の前肥を領せし際、同紀伊守元茂此地を分領す。代々隸屬の位地に在りて、本家の監督を受けたりと云ふ。方今戸數凡そ六百五十、人口凡そ三千、郡役所、收稅署、學校等ありて、何をモ規模宏大あるを見る。此地高等尋常の兩小學校あり、その外學校と稱すべきものなし、その佐賀に近きが故あり。此地は商業地と稱するよりも、寧ろ工業地と云ふべきか。人家の殆んど半數は、素麵製造を以て業とし、その他製絲を事とせるもの多し。水良好にして染物にも適當の土地ありと云ふ。平年は常食に雜穀を用ふるものなし、以て生活に餘裕あるを知るべし。概して貯蓄心に乏しく、凶作災害あれば、忽ち窮迫するに至るとぞ。

城址に櫻岡公園あり、鍋嶋紀伊守元茂此地に領主となり、其勝地あるを愛し之を拓く。公園記に曰く、

昔時戰國之際、鍋嶋氏據前肥、而紀伊守元茂爲小城領主、小城有勝地、曰鯖岡、倚山對海、可以馳眺望、元和中、元茂始種櫻花焉、其子加賀守直能、益種花築亭、改稱櫻岡、事偶達叡聞、後西院上皇賜御製之歌、一時紳縉和之、於是櫻岡之名始著矣、

後西院天皇の御製は、櫻岡頂上の石碑に刻めり、御親筆に係るものありと云ふ。

後西院天皇御製

詠岡花

和哥

ゆく花みほくゝる岡邊乃松れ葉はいつてをたしも色張そをた

小城の北に當りて連亘せる山岳を天山と云ふ。阿蘇大宮司宇治公維直、菊池武敏と共に、足利尊氏
の西奔を多々良濱に邀へ撃ち、克たずして此地に逃れ、千葉氏と戦ひ、終に自殺する時、遺言して天
山の頂上に埋葬せしむ。櫻岡に其碑あり、中に曰く、

延元々年、足利尊氏爲王師西奔筑前、阿蘇大宮司宇治公從菊池武敏邀戰於多々良濱、不克、身負重
創、走肥前小杵山自刃死、事見于太平記矣、(略)山在小城郡北、與松浦交界、上安五輪石、浮屠釋阿
蘇塔、即大宮司之藏也、傍有十餘碣、蓋葬其從者也、其地志載、多々良濱軍敗、大宮司聞關取山路、
出西肥、經千葉胤貞邑、千葉氏既附尊氏、土兵偵視敗將、起赴之、大宮司尙有兵百餘人、戰於天山、
寇重士殲、退至小杵山、道梗自殺、臨終謂從者曰、天山頂可望見阿蘇山噴烟、必瘞吾於此、因如其言
云、又曰、小杵在松浦郡、今呼枚羅山、南距天山之椒里許、(略)

十八日

晴。例時小城町を發す。殘月天にあり、行くこと半里、東方漸く白む。北方を回顧すれば天山屹立し、石

釜等の諸山左右に相連り、西方遙に眺むれば多良、温泉の二岳蜿蜒として南北に走り、曉靄の中より、初め一行の嶋原半嶋を過る、兩岳を前後に擁し、紫海の南岸を過ぐ。今は前肥を一廻して此地に來る、前程を顧みれば、悠々一里、漠とまで昨夢の如し。須臾にまで日東嶺に昇る、濃霧俄に漲る、咫尺を弁せず。暫くにてきて露る。行くこと一里餘、佐賀郡久保村に出つ、嘉瀬川を渡り、萩野に休む。此地に法勝寺の末寺あり、僧俊寛の遺跡あり、今寺は廢頽して住僧なく、什物は皆を本寺に藏せりといふ。己にして扇町を経て、午前九時佐賀市に入る。直に松原神社に至れば、尋常中學校生徒一行を社前より迎へたり。神社に三字あり、龍造寺隆信公、藩祖鍋嶋直茂公及閑叟侯を祀る。參拜了りて中學校に至る、茶菓の饗あり。校内にて午飯を喫し、休息多時、午前十一時辭して發す。新道を過ぎ行くこと一里半、筑後河畔に出つ。此河は佐賀福岡二縣天然の境界たり、幅員五十餘間。之を渡りて若津港に入る。筑後第一の良港あり、和船洋船輻湊之、桅檣林立せり。三潯郡大川町を過ぎ、幡保村を経て山門郡に入り、蓮池坂井の諸村を経て枝光村に休む。此間平路坦々一の奇をなし、唯だ渺漠たる原野を見るのみ。午後三時柳川町に達す。尋常中學校傳習館職員生徒一行を迎ふ。直に三柱神社に參拜す。次で傳習館に至る、茶菓の饗あり、休息少時にきて宿に着く。此日行程八里。當地出身學友諸氏より菓子餅等の寄贈あり。

三柱神社は、柳河藩祖立花左近將監宗茂公、其實父高橋紹運及び其養父戸次道雪の三神を祭る。抑も立花家は、大友氏より出づ。始め大友氏嫡男を筑前立花山に居らしむ、是より大友氏東西に分れ、東大友は二男之を繼ぎて本家たり、西大友立花氏は嫡男之を起し、が故に之を嫡流とす。然るに西大友は立花鑑載に至り、東大友より畔きければ、大友宗麟其將戸次道雪をして之を滅さしむ。後、宗麟、

毛利元就の勢強大なるを慮り、道雪をして西大友の遺業を繼がしむ。道雪既に西大友を繼ぎたるを以て、立花氏を稱すべきをりしを、元來東大友の臣ありしを以て避けて敢てせず、戸次を稱して身を終たり。道雪老て嗣をうりまかば、強て筑前岩屋の高橋紹運の子を養ふ、之を立花宗茂とす。後道雪は高良山の陣中に病没し、紹運は岩屋の孤城に據りて島津氏と戦ひ、終に自殺せり。

十九日

曇。例時柳河を發す。鈎月天に在り、曉寒甚輕し、鹽塚村に至りて天明け、日漸く東嶺に昇り、光輝映射、快言ふべからず。鷹尾村を經、行くこと一里半中島村に至る。矢部川に沿へる漁村あり。矢部川を渡りて三池郡徳嶋村に入る。道を黒崎に取り、堤防に依りて行くこと一里。一嶺あり、筑水の平野、此に至りて盡く。之を越ゆれば岬村に出づ、路海邊に沿ふ。前面遙に海を隔て、温泉嶽あり、霧を帯びて淡し。又大牟田炭坑の烟筒黒烟の迸るを見る。午前十時手鎌村に至りて休み午飯す。已にして發す。行くこと一里餘、學友故山本固一郎君の墓に至り、其靈を吊ふ。總代杉山富樫吊文を讀む。休息少時、茶菓の饗あり。午後零時半、大牟田村に入る、町内有志者並に炭坑社員より茶菓の饗あり。午後二時半瀛車にて大牟田を發し、高瀬、木葉の諸驛は睡夢の中に過ぎ、日暮池田驛に着く。留守教員諸氏及學友は歡呼して一行を迎ふ。一行肅々、午後五時半歸校す。正門内に圓陣を作り、校長は陣の中央に立ち、徐るよ告げて曰く、

今回の修學旅行は体操教師僅かに一名ありしにも拘らず、堅く軍紀を守り、平和に旅行を終へたるは、職員諸君の盡力の致す所なりとはいへ、抑も亦た諸子の忍耐勉強に由らざるべからず。此に一言を陳べて職員諸君の勞を謝し、併せて生徒諸子の勤勉を嘉す。

次で櫻井教授は職員を代表して告ぐることあり、

今回の脩學旅行に於て、日を費すこと十有五日、行程一百有餘里、諸子が忍耐と勉強とを以て、極めて平安よ、極めて健全に、此長途の旅行を爲し遂げたるは誠よ喜ぶべきことあり。且つ唯身体を鍛ひたるのみならず、到る處或は人情を察し、或は風俗を觀、或は種々實地に就て研究し、得る所實に多かり。諺にも百聞一見に如かずと云ふ如く、此迄唯だ傳聞に止まりしものも、此の旅行に由りて之を實地に確知し得たることあるべし。要するに今回の旅行は諸子に取りては此上なき好經歷とありたることは余の信じて疑はざる所あり。吾等教員一同も諸子と艱苦を同し、少からざる利益を得、茲よ無事旅行を終へたるは、偏に満足とする所あり。茲に職員一同より一言を述べ。

乃ち我校の萬歳を三呼し、歡呼湧が如き中に解散せり。時に職員一同より一行に饅頭を贈らる。時は午後六時ありき。適々細雨霏々として降り、一行の征衣を沾す。此日は朝來溫暖、日中には少く暑を感せずが、歸校まで一滴の降雨をかりしは、天幸と云ふべし。

此行や日を経ること十有五日、足跡三州を跨り、行程一百有餘里。此間快晴連日、榴風沐雨の苦なかりしかど、常に秋霜身を暴らし、其苦も亦た前者に劣らず。海に航しては舟行の難きを嘗め、山河を跋涉しては征途の苦を知る、皆筋骨を鍛ひ、心膽を練る資たらざるをかりき。殊に長崎にては捕獲軍艦操江を見て清虜の無狀を憤り、英國東洋艦隊旗艦センチュリーオンを見ては彼が東洋を横行するを慨し、大に敵愾の精神を發揮するを得、其他造船所、製鐵所を見ては其規模の廣大なるを知り、水雷布設を見ては其術の深遠なるを悟り、佐世保軍港に至りては海軍軍備の宏大あるを詳よせり、其他到る處異郷の山水風土を觀、人情風俗を察し、或は神社佛閣を訪ひ、名所舊蹟を探ぐる等、新事業、新事物に

就きて觀察を下し、見聞を廣め、智識を發するを得たる。其益亦大なりと謂ふべき。實に修學旅行の名に背かざるあり。夫の職員生徒及び新舊生徒の親睦を増進したるが如きに至りては固より言ふを待たず。殊に終に臨みて特筆大書すべきことあり。今回の旅行たる体操教師としては僅よ一人のみ、故に役員は總て生徒中より選べり、而て選拔諸氏は皆能く其職を勉め、一行の諸氏も亦能く其の命に服し、到る處整々肅々、我校の威嚴を損せず、九州無二の學校生徒たるに耻ぢざりき。是れ學校長を初めとし職員諸氏の注意周到なるの致す所とはいへども、抑も亦た生徒諸氏の忍耐勉強ありしに由らずんばならず。我校已に數回の脩學旅行ありしうとも、未だ嘗て此に比すべきものあらざりき。蓋し今回の旅行は、生徒の自治あり、故に各自殊に自重の精神を有したり。嗚呼是れその、能く各自ら身を檢し律を重じ、以て我校の面目をして益重きを得せしめたる所以ある歟。